＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

住まいル新聞

日本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.141 2011 6月号

大月人物伝　黎明期の大月名町長　小林　晴直

■生誕の地

大月の市内から約十数分、「平井圭齋翁」の碑を斜め右前方に見ながら右折すると、真木の中心地への本通りに入る。

坂を上り中央道の上に掛かる橋を渡ると直ぐ二軒ほど大きな屋根が見える。一軒は「平井圭齋翁」の生家、その隣が屋号「和泉屋」（いずみや）と呼ばれる小林晴直元大月町長の家である。「和泉屋」は真木でも有数の旧家であるが、その事を横に置いても、真木及び大月の歴史を語る時、小林晴直という名前を外すことは出来ない。

晴直は父喜作・母とよの次男として、明治十七年七月十七日に、真木一九八〇番地で生まれた。晴直の生年月日を見ると、七という字が三つ並ぶ。偶然とはいえ不思議な響きを感じる。

ラッキーセブンという言葉があるが、その生い立ちを知るほどに、生まれた時から表道を歩く運命の人だった？そんな思いにさせられる人物である。

晴直の生まれたのは、廣里村真木であるが、その昔廣里村は、駒橋・大月・花咲・真木の四地区を一つの行政区としていた。その中心的役割を果たしていたのは真木地区であったようだと、当時を語る人もいる。

大月町として町制を敷いたのは、一九三三年四月一日である。

そして一九五四年に大月市となるまでは二十一年間あるわけだが、町政の黎明期の基礎を築いた人物として、小林晴直の名を上げる人は多い。

■学歴と経歴

小林晴直の父喜作は、子供たちの教育には特に熱心だったようである。晴直は高等小学校卒業後東京の京華（けいか）中学校を卒業しているが、明治時代に東京の中学校に入学させるというのは、親が相当教育熱心でないと不可能なことである。京華中学は現在学校法人京華学園として、京華中学校・高校のほかに、京華商業高等学校・京華女子中学校・女子高等学校を開設している。京華学園は現在は東京都文京区白山にあるが、晴直が通っていた当時は本郷にあり、創立時から旧制一高（新制東京大学教養学部の前身）への進学校として名高く、当時の卒業生には錚々たる面々が並ぶ。映画監督・黒沢明、日本画・前田青邨、歌舞伎俳優・二代目尾上松緑、国立がんセンター名誉総長・杉村隆など四名の文化勲章受章者をはじめ、多彩な人材を各界に輩出している。そういう名門校へ進学させた父喜作の考えは、当時の人間としてはかなり進歩的であったと思われる。と同時に本人もまた相当優秀であり向学心も旺盛であったのだろう。

晴直には二人の弟と一人の姉と二人の妹がいたが、次弟は大阪府立高等医学校（現国立大阪大学の医学部）を卒業し、長いこと眼科医として大月市民にも馴染みが深い人だったので、「小林眼科医院」の盛信先生を記憶している人も多いのではなかろうか。

末弟も京華中学校を卒業し、その後郷里に戻って分家。「和泉屋商店」の店主として地域の人たちには馴染み深い人物であった。

また末の妹の「とめじ」は甲府高女に進学しているが、これは当時の女子としては異例の事だったと思われる。因みにその頃の女学校の入学願書には、財産の記入箇所があり、其処に山林八十町歩と記載されていて、学校側が驚いたというエピソードもあったとか。

余談ではあるが、小林眼科の開業は当初甲府市内であった。人望もあり名医でもあったのであろう。遠くから多くの患者が来院し、その為に病院近くに宿屋まで出来たそうである。

やがて地元の大月の地に戻って開業する事になった時に、その旅館も一緒に大月に移住してきたそうだが、御太刀に近年まで開業していた「たくみ館」が、小林眼科と共に甲府から移住してきた旅館だという。

このことは知る人ぞ知るといったエピソードであり、良き時代を偲ばせる心温まる話でもある。

京華中学校を卒業した晴直は、更に京都の高等工芸高校へ進学している。東京から京都へ進学した晴直の諸事情は分からないが、相当の経済力と、熱心な保護者の理解がないと可能にはならない経緯ではある。

この高等工芸学校は一八九九年二月、帝国議会で承認された国立の専門学校で、本科は修業年限が三年。色染科・機織科・図案科の三科に分かれていて、この内の図案科の科設は、既設の東京美術学校（現東京芸大）・東京高等工業学校（現東京工大）に次ぐものであった。

京都高等工芸高校は、一九五一年に施行された学制改革によって、国立京都工芸繊維大学として新設され現在に至っている。

工芸学校を卒業した晴直は、大正六年に村会議員になるまでの一時期、山梨県立工業学校（現県立谷村工業高校）に勤務している。谷村工業高校の沿革を簡単に紹介すると、

明治二九年三月　山梨県南都留郡染織学校を谷村町に設置す
明治三四年四月　工業学校程度に変更
明治三四年五月　郡立南都留染織学校と改称
明治三四年十月　南都留郡組合立に変更し、郡組合立都留染織学校と改称
明治三八年四月　山梨県立工業学校と改称し、北都留郡大月町に移転
明治四三年四月　徒弟学校程度に変更し、南都留郡谷村町県工業試験場内に移転…とある。

この中の「工業学校と改称し、大月町に移転」とある時期に教師として勤務していたものと思われる。

■気概と実績

晴直が村会議員になったのは、大正六年三十三歳の時である。

当時の日本経済状況は？というと、大正三年に勃発した第一次世界大戦による経済効果で、日露戦争後の外債の償還や、重工業製品輸入を通じて生じた大幅な貿易収支赤字を切り抜け、翌大正四年からの五年間は、

次ページに続く

大月人物伝
歴史探訪

黎明期の大月名町長　小林　晴直

経済収支に於いて大幅な黒字国となった。しかし大正七年に第一次世界大戦が終結し、その後二年ほど持ちこたえた好景気も、大正九年には株式市場が大暴落し、反動恐慌が勃発した。いわゆる昭和の大恐慌である。

この恐慌を契機に輸出と生産活動が縮小し、投機ブームの崩壊は海運・貿易・重化学工業に大きな打撃をもたらした。

第一次世界大戦前後から重化学工業化が進展してきた日本であるが、その競争力が弱体だったため、技術力や商品力に勝るヨーロッパの企業との競争には勝てなかった。その結果、戦時中に投資した生産設備が過剰となり、倒産企業が続出したのである。

また辛うじて倒産を免れた企業も、大戦中に蓄積した資産の取り崩しを余儀なくされた。

そんな世情を背景に金融業界においても、投機の過熱などで恐慌の一年ほど前から、資金繰りが悪化し始めていた。

やがて輸出制限や輸入税の減免、更にはヨーロッパの通貨暴落による輸出の減少が重なり、輸出と輸入の不均衡が顕著化した。同時にこの不健全な経済状態のあおりを受けた銀行の倒産件数も増加したのである。

北都留郡甲斐絹組合の副会長をしていた当時の晴直は、製品の輸出事業の中心的役割を果たしていたが、銀行倒産のあおりを受けて、不渡りを余儀なくされそうになっていた友人知人の債務者を助けるため、私財を投げ打ったといわれている。

当時は今と違って、山林は正に宝の山であった。彼は個人所有の八十町歩もの山林の木を、しかも丁度伐採適期の木を全て切り倒し、その木を製材するために、臨時の専用製材所まで作って、人助けをしたという。

一見温厚そうに見えたが、意志は極めて強固で、芯に揺るぎない信念を秘め、その気概は任侠的であったとか。

こうした晴直の生き方の原点は、地域への奉仕と献身に生きた、彼の曾祖父である小林五郎左衛門にあると言及する人もいる。

今から三七七年前の一六三三年（三代将軍家光の時代）、郡内領一万八千石の谷村城主として、上州（正式には上野国総社）より赴任してきた秋元家（初代但馬守泰朝）は、その後三代七十二年にわたって郡内を治めたが、この何れかの時期に着手・完成された真木の用水路は、以来真木の住民の生活や農業に欠かせないものとなった。しかし、当時の工事では絶壁に、欠損した水路の莫大な費用がかかってある。それでも幕府時代には、代官所に情すれば、何とか公理して貰えたのだが奉還後の明治政府に交・軍備・教育という総力を上げねばならない面の重要課題が山積あったため、内政の諸事には保護の手がかった。

そのため真木の用確保・維持には、村役と金銭的負担が増のである。この事にめた五郎左衛門は、九年から二十年にか私財を投じて石工を断崖に穴を開けて水工事を敢行したのだ

この用水路は当時の形で現在も使用さり、その恩恵に浴し真木の村人によって左衛門への感謝と敬は、長く語り継がれているのである。

「三つ子の魂百まで」というが、村人という語り部によって語り続ける五郎左衛門の

て、いわゆる百間樋れた箱樋を渡して通方式であったため、脆いという弱点があ

従って大水等の災害の度に、欠損した水路の修復にに尽くすという事は難しいが、小さな思いやりで構築する人間関係なら、私にも挑戦出来そうだ・・と。そしてやがてその時が来たら。「ああ、生まれてきて良かった」という思いで締めくくりたいものだ…と。

因みに晴直は昭和四十四年十月十一日、八十五歳の生涯を終えているが、曾祖父の五郎左衛門も、奇しくも同じ八十五歳という長寿を全うしている。この事は偶然とはいえ二人の因縁の深さを感じないではいられない。

晴直の嫡子正行氏も市会議員として市政に携わって活躍し、また嫡孫の正民氏も現在市役所職員として活躍されている。

★尚、今回の執筆にあたり、晴直元町長の甥に当たる渡辺弘氏及び嫡孫である小林正民氏には、貴重な資料やエピソードを提供して頂きました。心より感謝申し上げます。

に、幼少期の晴直が強く影響されたであろう事を否定できない。

北都留郡誌によると、大正十一年十月三十日、村長時代に晴直は北都留郡長表彰を受けている。表彰理由は「村内平和」と「部下統督」とある。

晴直が建設した製材所は、人助けのためにだけ作られたもので、その後は使用される事も無く、その事実を知る者も少ない。

■公選による初の町長誕生

廣里村から大月町へと名称を変えたのは、昭和八年である。村会議員はそのまま町会議員となり、また当時の村長であった小宮淑郎氏がそのまま初代の町長に就任したが、これは公選によるものではなく、町会議員による互選で決定されたものである。昭和十一年に初めて公選で選ばれた町長が小林晴直である。

晴直は名町長として人望を集めたが、それは彼が常に清廉潔白であったからである。

彼は町長としての交際費に、公費を一切使わなかったといわれているが、この事は経済的な余裕云々ではなく、社会への奉仕と献身という彼の人間としての一貫した信念に基づくものであったのではないか？

金融恐慌時に人助けをした時と同じように、それが彼の目指す理想的な生き方であったのかも知れない。と同時にそこに彼の人間としての尊厳を感じるのである。

かの宮沢賢治が、「雨ニモマケズ」という詩を書いているが。この詩に貫かれている信念には、賢治の人間としての尊厳が貫かれている。そして晴直にも、宮沢賢治に共通する人間としての深さを感じるのである。

人間の尊厳とは？　人によって解釈の仕方は違うだろうが、人間は唯一無二の存在であり貴重だからこそ、尊い存在なのだ・・・説く人もいる。唯一無二の存在というのは、分かりやすく言うと、Aという人間は絶対にBという人間にはなれないということである。

人間は夫々が違った考え方や感じ方を持っているからこそ、唯一無二なのだというのである。加えて言うならば、その人にしか生きられない道を生き抜く貴重さであるともいえる。

そして、夫々の人間が、お互いに影響し合うことで、世の中が変わり、個人的な成長も得られるのだから、その事をちゃんと理解したならば、今世相をにぎわしている無差別殺戮や、友人知人による殺人・肉親による殺傷事件などの憂慮すべき凶悪犯罪も起きないのではないか？そんな事を考える時、私（執筆者）は最近ふと思うのである。世知辛い現代社会の中で、五郎左衛門や晴直のように、利害を超越して社会や人のために尽くすという事は難しいが、小さな思いやりで構築する人間関係なら、私にも挑戦出来そうだ・・と。そしてやがてその時が来たら。「ああ、生まれてきて良かった」という思いで締めくくりたいものだ…と。

因みに晴直は昭和四十四年十月十一日、八十五歳の生涯を終えているが、曾祖父の五郎左衛門も、奇しくも同じ八十五歳という長寿を全うしている。この事は偶然とはいえ二人の因縁の深さを感じないではいられない。

晴直の嫡子正行氏も市会議員として市政に携わって活躍し、また嫡孫の正民氏も現在市役所職員として活躍されている。

★尚、今回の執筆にあたり、晴直元町長の甥に当たる渡辺弘氏及び嫡孫である小林正民氏には、貴重な資料やエピソードを提供して頂きました。心より感謝申し上げます。

資料提供者　小林正民　氏
渡辺弘　氏
執筆者　小俣早苗